

B－１．指導と評価の工夫改善（課題克服のために）

(1)「既習を使うと新たな問題も解決できる」ことを実感できるような指導を考える

算数科は、前に学習したことが確実に身に付いていないと、新しい学習を積み重ねていくことが、難しい教科である。

例えば小数×小数の計算をするためには、①かけ算の九九ができる ②繰り上がりのあるたし算ができる ③整数×整数の筆算ができる ④小数×整数の筆算ができる ⑤ 2.3 は 0.1 がいくつあるかという見方ができる などが定着していなければならない。

また、長さは単位のいくつ分で表すという学習は、重さ・かさ・面積・体積にずっとつながっていく学習である。

つまり、算数科では既習の定着が重要であり、逆にいえば、既習がしっかりしていれば新たな問題も解決できる可能性があるということになる。

しかし、既習が定着しているだけでは問題は解決はできない。その既習をいつ、どのように使ったらよいか？ということがわからなければならない。

そこで、児童には、「何が」わかったのか？「どうしたら」わかったのか？をはっきりさせながら、「こんな時にこんな既習を使うと問題が解決できた！」という経験を積み重ねていく指導をしていきたい。

(2)児童の実態にあったカリキュラムを考える

実際に指導するにあたり、各学校で作成したカリキュラムの流れ通りに行われることが多い。

しかし、自分が受け持った児童の実態や教材の特性を考えてカリキュラムを編成し直すことが大切であると考えます。どうすれば児童の学びがスムーズになるか、どうすれば考える力が身についていくか、どうすれば無駄な時間を短縮し、表現処理能力の習熟やふりかえりの時間を確保することが、可能になるかなどを考えて編成していきたい。

(3)学び合いのある学習の積み重ねをする

児童が課題意識をもち「なぜ？どうして？」が「わかった！なっとく！」になるために、次のような手だてが大切であると考えます。

①考えるに値する課題を設定する

- ・児童の実態を把握した上で、何を考えさせるのかをよく見極める。

②児童が課題を自分のものにできるような学習の流れを考える

- ・教師が「今日はこれを考えよう」といって提示するのではなく、「なぜ？どうして？はっきりさせたい！」と思うような学習の流れで課題意識を高める

- ③児童が考えてくるであろう「間違いやすい考え」「不十分な考え」「既習を使った考え」等を、どのように関連付けて、どのように位置づけるかを考えておく
- ・個に応じた指導とよく言われているが、いつもいつも個別指導ができるわけではない。全体学習の中で個に応じた指導とは、それぞれの児童の考えを、それがたとえ間違っているとしても不十分であっても、どこがまちがっているのか、どこが不十分であったのかがわかり、学習の中に位置づいていくことが、個に応じた指導になると考えている。そのために、予想される児童の考えをどのように関連づけてどのように位置づけるか、をよく考えておく。

(4)評価の工夫改善

①学習のふりかえりで評価する

学習をふりかえることは、基礎・基本・考え方の定着につながる。特に、20時間近くになる単元では、最初に学んだことを忘れてしまいがちである。学習内容を定着させるには、3段階のふりかえりが有効であると考えた。

a：毎日のノートは、児童がどれだけ理解しているかをみて、次時の指導改善と補充につかう（形成的評価）

- ・児童の中には、書くことがもともと好きな児童と、苦手な児童がいるが、今日の学習は「なっとく！」「忘れちゃ大変！」と感じると、苦手な児童もノートを書く時間がほしいというようになってくる。ノートのふりかえりは児童の学びの足跡である。特に一単元が長いときは、最初の方を忘れてしまいがちなので、児童の発言に「前にやったけど・・・」が出てきたときには、「いつ」学んだこと・「どんな」内容・「役に立つノート」を意識させ、ふりかえりの有効性を感じとれるようにする。また、ふりかえりの内容は教師にとっては自分の授業の評価である。次時に不十分な点を補足したり、理解が不十分な児童に個別に補充することができる。

b：各自の単元のふりかえりは、児童がどれだけ単元の大切なところがわかっているのかの評価に使う

- ・いずれは自分の力だけで、この単元では何をどのようにまとめていったらよいかを考えてふりかえられるようにしたい。しかし、そのようなふりかえりの経験がないと、「何を」「どのように」書くかを判断することがとても難しい。段階を追ってふりかえりをしていくようにする。
- ・お互いにノートを見合って、友達のよいところを学び合うことも大切である。

c：各自のふりかえりを元に、クラス全体としてのふりかえりをし、模造紙に残して掲示しておく

- ・各自のふりかえりだけでは、大切なポイントがぬけていたり、書き表し方が不十分だったりする。みんなの考えのよいところを出し合って、全員が共通して大切だと思うことを、既習として残しておくことが次の学習に生きる。

②思考をみるための自作のテスト問題を行う

学習したことが生かせる思考問題を作成することで、ねらいとしたことが定着しているか判断することができる。児童にとっては毎日の学びの大切さがわかる。教師にとっては、実態把握と指導改善ができる。